3か月予報 (今夏の天候見通し)

2017年5月27日(土) 気象庁気候情報課 竹川元章

夏(6~8月)の天候の見通し(1)

3か月の平均気温・降水量

		平均気温(3か月)	降水量(3か月)
北日本	日本海側	低20並30高 50 %	少30 並 40 多30% ほぼ平年並 の見込み
	太平洋側	高い見込み	少30 並 40 多30% ほぼ平年並 の見込み
東日本	日本海側	低 20 並 30 高 50 %	少30 並 40 多30% ほぼ平年並 の見込み
	太平洋側	高い見込み	少30 並30 多 40 % ほぼ平年並 の見込み
西日本	日本海側	低 20 並 30 高 50 %	少30 並30 多 40 % ほぼ平年並 の見込み
	太平洋側	高い見込み	少20 並 40 多 40 % 平年並か多い 見込み
沖縄	• 奄 美	低 20 並 30 高 50 % 高い 見込み	少30 並30 多 40 % ほぼ平年並 の見込み
	直は予想される 見確率です	平均效温(3 か月) 北日本	北日本(日) 東日本(日) 東日本(大
			西日本(太) 沖縄・奄美 多し

- ・全国的に暖かい空気に覆われやすく、盛夏期には太平洋高気圧が本州付近に張り出しやすい見込み。このため、向こう3か月の気温は全国的に高い見込み。
- ・西日本太平洋側では、梅雨の時期は、梅雨前線に向かって南から湿った空気が流れ込みやすく、向こう3か月の降水量は平年並か多い見込み。

(平成29年5月24日発表)

夏(6~8月)の天候の見通し(2)

月別の平均気温・降水量

	平均気温 6月	平均気温 7月	平均気温 8月
北日本	低20 並40 高40% 平年並か高い 見込み	ほ20 並40 高40% 平年並か高い 見込み	値20 並30 高50% 高い 見込み
東日本	6 20 並 40 萬 40% 平年並か高い 見込み	ほ30 並30 高 40% ほぼ平年並 の見込み	値20 並30 高50% 高い 見込み
西日本	低 20 並 40 萬 40% 平年並か高い 見込み	● 30 並30 馬 40% ほぼ平年並 の見込み	低20 並30 高50% 高い 見込み
沖縄・奄美	低30 並30 高40 % ほぼ平年並 の見込み	(6 20 並30 高 50% 高い 見込み	(620 並40 高40% 平年並か高い 見込み
数値は予想される 出現確率です	gas et	10+	124
	eax sax	est Par	757
	(KL) (株) (株) (株) (株) (株) (株) (株) (株) (株) (株	(5) 10 40 40 50 251 (15) (15) (15)	#56 40 40 50 数年 (NO bit サイドをかって 04 (NO

・6月は北〜西日本、7月は北日本と沖縄・奄美中心に、気温は平年並か高い見込み。

(降水量の多い地域は平年並に近 いイメージ)

	,	降水量	6月	路水量	7月	降水量	8月
北日本	日本海側	少30 ± 40 ほぼ平年並	100000000000000000000000000000000000000	少30 並40 ほぼ平年並	100 de 70 de	少30 m40 ほぼ平年並	CO. 1 CO. 1 CO. 1
	太平洋側	少30 並 40 ほぼ平年並		少30 並40 ほぼ平年並		少30 ±40 ほぼ平年並	
東日本	日本海側	少40 m 30 ほぼ平年並	F 200 T	少30 ±30 ほぼ平年並		少40 m30 ほぼ平年並	
	太平洋側	少30 m 40 ほぼ平年並		ッ 20 並 40 平年並か多		少40 m30 ほぼ平年並	- 1 7 - C - V - C - V -
西日本	日本海側	少30 型40 ほぼ平年並		9 20 並 40 平年館か多		少40 並30 ほぼ平年並	
	太平洋側	少 20 並 40 平年並か多	and the state of t	少 20 並 40 平年盤か多	- I - I - I - I - I - I - I - I - I - I	少40 ±30 ほぼ平年並	
沖縄・奄美		少 20 章 40 平年並か多		少40 並30 ほぼ平年並	A 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	少30 ±30 ほぼ平年並	and the state of t
	自は予想される 存在水です	9818 9819	1 tarm	60177 6019 184	1010	OUT:S BILLS	1000
		9801 - 611 9801 - 611	40 50 健申 eo- ² 以上(W)	年前 电单 9051 20年 50 40 (%) 82 上中中的	40 50 日本 40 51 (W)	95(1) 概率 50 40 (%) 出 2 #EPP	40 50 健川 40 11 (所

- ・6月の西日本太平洋側〜沖縄・奄美は平年並か多い見込み。
- ・7月の東日本太平洋側~西日本は、平年並か多い見込み。

(梅雨期の後半を中心に降水量が 多い傾向のイメージ)

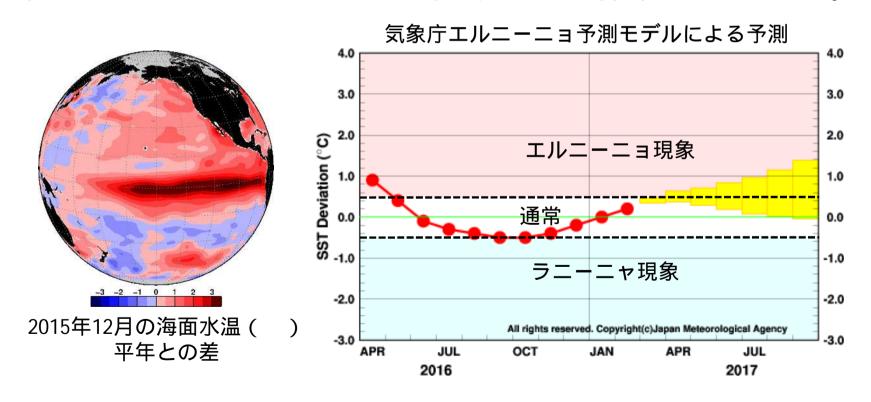
(平成29年5月24日発表)

エルニーニョ現象の見通し

5月12日発表エルニーニョ監視速報より

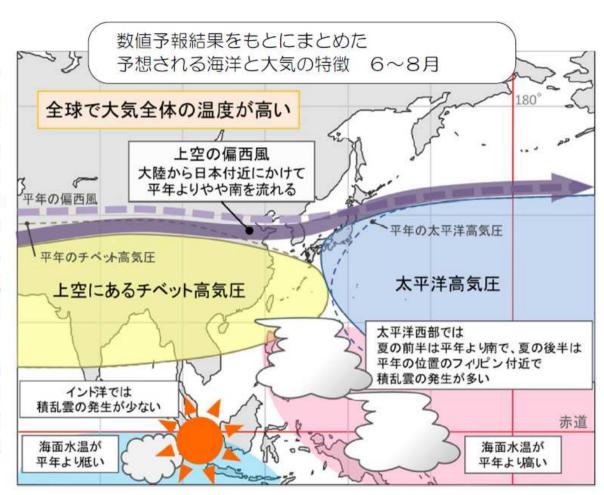
3 か月予報は、主にエルニーニョ現象など海洋のゆっくりした変動に対する大気の 応答をシグナルとして抽出している。

- エルニーニョ監視海域の海面水温が基準値より高い状態が続いているが、 エルニーニョ現象として発達する明瞭な兆候は見られない。
- ・ 秋のはじめまでにエルニーニョ現象が発生する可能性は50%である。



予想される海洋と大気の特徴

- 全球で大気全体の温度が高いでしょう。
- 熱帯の海面水温は、太平洋西部ではニューギニア島の東で顕著に高く、インド洋では東部を中心に低い見込みです。このため、太平洋西部では夏の前半は平年より南で、夏の後半は平年の位置のフィリピン付近で積乱雲の発生が多く、インド洋では積乱雲の発生が少ないでしょう。
- この影響で、梅雨の時期の上空の偏西風は大陸から日本付近にかけて、平年より南を流れる見込みです。
- ◆ 太平洋高気圧は、梅雨前線の南で西への 張り出しが強く、盛夏期には本州付近に 張り出しやすい見込みです。梅雨の時期 は、西日本太平洋側を中心に湿った空気 が流れ込みやすいでしょう。



近年の夏の高温傾向

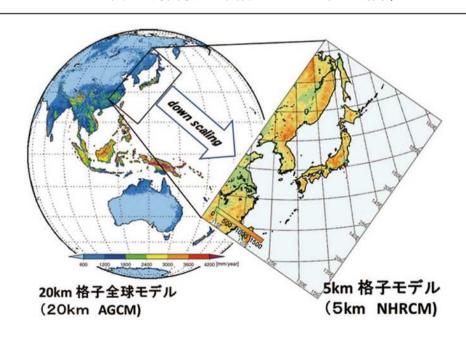
19	-	最近10年	の夏平均	気温		
	年	夏の平均気温 平年差℃ (階級)				夏の天候の特徴
	+ [北日本	東日本	西日本	沖縄・奄美	を
	2007	0.6(+)	O.1 (O)	0.2(0)	0.4(+)	7月上~中旬台風第4号と梅雨前線で大雨 国内最高気温記録更新
	2008	-O.1 (O)	0.2(0)	0.3(0)	0.4(+)	梅雨期少雨傾向 平成 20 年8月末豪雨
	2009	-O.4(O)	-0.2(-)	-O.1 (O)	0.2(+)	平成21年7月中国・九州北部豪雨 中国・北陸・東北梅雨明け不明瞭
	2010	2.2(++)	1.5(++)	0.8(+)	0.1(0)	北・東は第1位の高温 7月中旬に九州北部などで豪雨被害
	2011	1.O(+)	0.9(+)	0.5(+)	O.3(+)	平成23年7月新潟・福島豪雨 台風第12号で紀伊半島を中心に大雨
3	2012	0.7(+)	0.6(+)	0.4(+)	0.1(0)	平成 24 年7月九州北部豪雨 西日本と沖縄・奄美で多雨・日 照不足
3	2013	1.0(+)	1.1 (++)	1.2(++)	0.7(++)	秋田県・岩手県・島根県・山口県で豪雨被害 東日本太平洋側 と沖縄・奄美で少雨 国内最高気温記録更新
	2014	1.2(+)	0.5(+)	-0.3(-)	0.3(+)	平成 26 年8月豪雨 8月はほぼ全国的に多雨
	2015	0.6 (+)	0.3(0)	-0.5 (-)	0.6 (++)	西日本で低温・多雨・日照不足 北日本と沖縄・奄美は高温
	2016	0.7(+)	0.6(+)	0.7 (+)	1.1 (++)	全国的に高温・多照 北日本太平洋側は記録的な多雨

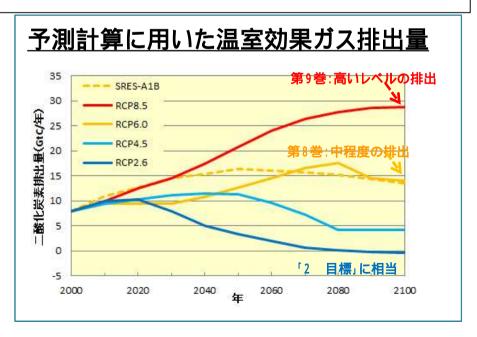
階級 --:かなり低い -:低い ○:平年並 +:高い ++:かなり高い

- ●エルニーニョ現象発生年 ●ラニーニャ現象発生年
- ・近年は暑夏の頻度が多い。
- (冷夏は、エルニーニョ現象発生年に一部地域のみ)
- ・毎年の様に豪雨災害が発生している。

「地球温暖化予測情報」

- ●「地球温暖化予測情報」:地球温暖化の緩和策や適応策の検討に資すること、また、地球温暖化に関する科学的な知識の普及を目的に、数値モデルによる地球温暖化の予測結果をまとめた情報。平成8年度より数年おきに公表。
- ●「地球温暖化予測情報第9巻」(平成29年3月公表):防災上の意識を高める観点等から、 最も高程度の温室効果ガス排出が続くと想定 2 した場合の日本の気候変化を、地域モデル(水平解像度5km)で予測。4通りの予測結果 3を用いて、将来の年々変動の幅や予測の信頼度を評価。
 - 1 IPCC AR5で想定されている4つの温室効果ガスの濃度シナリオのうち、2番目に温室効果ガスの排出が多いものに相当。
 - 2 IPCC AR5で想定されている4つの温室効果ガスの濃度シナリオのうち、最も温室効果ガスの排出が多いもの。
 - 3 4つの異なる海面水温の変化パターンを与えた結果。



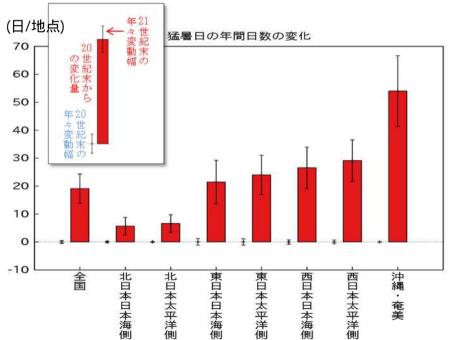


「地球温暖化予測情報第9巻」(気温、積雪·降雪)

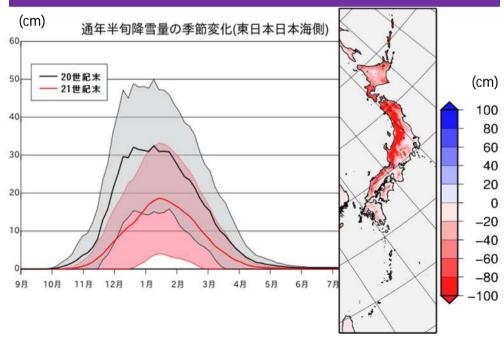
21世紀末(2076~2095年)の日本は、20世紀末(1980~1999年)と比較して、以下のような変化が予想されている。

- <u>年平均気温は全国平均で4.5 上昇</u>。■ 国民生活や生態系等へ広〈影響
- <u>猛暑日(日最高気温が35 以上の日)</u>となるような極端に暑い日の<u>年間日数</u>は全国的に 増加し、東日本太平洋側では24日程度増加。
 熱中症リスクの増大
- <u>年降雪量は本州日本海側で大き〈減少</u>し、降雪期間及び積雪期間は短〈なる一方、20世紀末と同程度の降雪量となる年もある。
 国民生活や水資源管理等へ広〈影響

猛暑日の年間日数の変化量



(左)東日本日本海側における降雪量の季節進行(右)年最深積雪の変化分布(21世紀末 - 20世紀末)



「地球温暖化予測情報第9巻」(降水)

21世紀末(2076~2095年)の日本は、20世紀末(1980~1999年)と比較して、以下のような変化が予想されている。

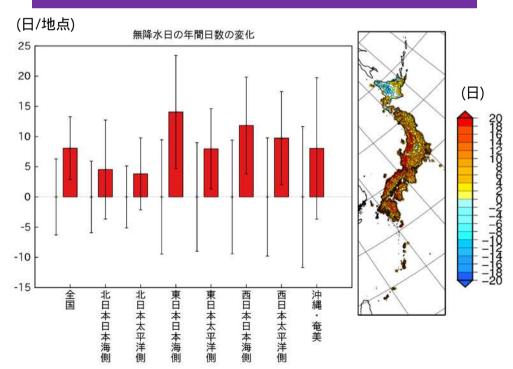
- 大雨(日降水量200mm以上)や短時間強雨(1時間降水量50mm以上)の年間発生回数は、全国平均で2倍以上増加。 大雨による自然災害リスクの増大
- 雨の降らない日数は、全国的に増加し、東日本太平洋側では、年間で8日程度増加。

水資源管理への影響、干ばつリスクの増大

1時間降水量50mm以上の年間発生回数

(回/地点) 1時間降水量50mm以上の1地点あたりの発生回数の変化 3.5 3 2.5 平均発生回数 20世紀末の 平均発生回数 2 1.5 0.5 沖縄・ 西日本日本海側 北日本日本海側 北日本太平洋側 東日本日本海側 東日本太平洋側 西日本太平洋側

無降水日の年間日数の変化量





おつかれさまでした